

はじめに

呼吸器内科をローテーションする研修医から「胸部 X 線や CT を読めるようになるには、どう勉強したらよいですか？」という質問をよくされます。胸部画像検査は患者さんに苦痛を与えずに、とても多くの肺内情報が得られる貴重なものです。肺の内部は、気腔や、気道、脈管が基本ですが、その構造は緻密で、外気に直接つながっているため病気も多彩に存在します。例えば、感染性疾患の原因だけでも肺炎球菌や、マイコプラズマ、インフルエンザ菌、肺結核や非結核性抗酸菌などが存在します。さらに、真菌感染症やニューモシチス肺炎など、免疫不全状態では原因微生物の鑑別は広がります。また、肺癌を主体とする肺腫瘍や、間質性肺炎、アレルギー性疾患、全身性疾患、先天性疾患など幅広く存在します。

1895年に Röntgen による X 線の発見から肺が透視できるようになり、胸部疾患診断は著明に向上しました。その後、1973年に Hounsfield によって開発された CT (computed tomography) は、体内を透過してきた X 線の強弱を電子信号に変えてコンピュータにより画像化したものです。この CT の進歩も著しく、今日では 2mm 以下のスライス厚でも肺野が鮮明で、病理組織学的所見と対比して検討することが一般的になっています。

私自身が呼吸器内科医を専攻しようと思ったのは、研修医時代に胸部 X 線や胸部 CT を理路整然とカッコよく読影していた先生が輝いて見えたのがきっかけです。「カッコよく読影するためには、どうやって勉強すればよいのか?」、多くの教科書は難しい用語ばかりで文字数が多く、わかりにくいものでした。そのため、研究会や学会などでわかりやすく解説してくれる先生の読影を聞いて、耳学問で勉強することが最も効果的だったと考えていました。本来は疾患から画像所見を学ぶのではなく、画像所見から鑑別診断を挙げていく整理された教科書があれば、より早くに読影力が上がるはずだと長年思っていました。

今回、学研メディカル秀潤社の谷口陽一編集長から、「わかりやすい教科書を作っちゃいましょうよ」とありがたい声をかけていただきました。いつもカッコよく読影されている聖路加国際病院の栗原泰之先生と御一緒に、第一線で呼吸器内科診療をされ画像診断に精通されている先生方とともに、初学者にもわかりやすい内容の教科書作りに取組みました。本書は、胸部 CT 画像所見をどのように読影すべきなのか、カッコよく読影するためのポイントを的確に記述しています。これから呼吸器内科医として活躍していく先生方に、読影力を向上させるための本ができた大変嬉しく思っています。

最後に、本書を刊行するまで休日夜間を問わずに尽力いただきました谷口陽一編集長に深く感謝申し上げます。

2020年10月

杏林大学医学部呼吸器内科学
教授 石井晴之